

氏名(本籍)	鈴 ^{すず} 木 ^き (本田 ^{ほんだ})紀 ^{のり} 子 ^こ (福島県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第4471号		
学位授与年月日	平成19年7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	"The Re-Invention of the American West: Women's Periodicals, Gendered Geography, and Identity in the Late Nineteenth-Century United States" (アメリカ西部の再創出－19世紀後半の合衆国における女性雑誌, ジェンダー化された地理学, アイデンティティ)		
主査	筑波大学准教授	Ph.D. (文学)	竹谷悦子
副査	筑波大学准教授	Ph.D. (レトリック)	対馬美千子
副査	筑波大学准教授		中田元子

論文の内容の要旨

本論文は、西漸運動による領土拡張の歴史過程のなかで生成された「西部」言説と、同時代的に発展を遂げた米国のジャーナリズムとの関連性を、ジェンダーを基軸として再検証を試みるアメリカ研究論である。十九世紀のアメリカ合衆国の帝国主義的拡張は、「フロンティア・スピリット」や「明白な運命」などのスローガンのもと、白人男性のマスキュリニティーを称揚するかたちで遂行されていったが、本論文は、「西部」という地政学的概念の創出に、女性ジャーナリストたちがどのように関与／介入していったかを、当時の新聞や雑誌などの一次資料を丹念に読み解くことにより解明している。

第一章では、1980年代から本格的に着手された西部女性研究を整理し、その方法論の限界点を指摘したうえで、本論文が行うジャーナリズム研究の妥当性を導き出す。従来の研究は日記や手紙などの私的テキストを発掘し、そのなかから女性の「声」を回復していくことを主眼としていたが、研究者たちはその作業のなかで、女性の領域はプライベートな領域／家庭であるという十九世紀的ジェンダー・イデオロギーをも再生産するという誤謬を犯したと、論者は指摘する。さらに、西部の女性が記録する、家事や家族関係、結婚、妊娠などといった一見「私的な」な事柄は、個人的な問題ではなく、むしろ当時の性の政治学と密接に結びついており、女性はそこから家父長的社会構造に対する潜在的な対抗言説を紡ぎだしていくことが可能であったと論じる。

第二章では、1890年代のアメリカのポピュリズム、とりわけ西部の農民運動が、女性運動と連動しながら推進されていった経緯に着目する。この農民運動と女性運動の相関性を解明するため、論者はカンザス州で女性により編集・発行されていたポピュリスト運動の公式機関誌 *Farmer's Wife* を発掘・調査する。論者によれば、ジェンダーをめぐる重要なイデオロギーの改変の可能性が、この女性による農民運動のなかで生まれていたという。つまり、農民と資本家との階級闘争のなかで、女性というカテゴリーもまた、自然／生物学を基盤とした「性別」(sex) から社会的構築物である階級(class)へと修正されていくという可能性である。このジェンダーの再定義ならびにジェンダー・システムと経済システム(資本主義)の連関への批判的視座により、*Farmer's Wife* で展開される議論は1970年代のマルクス主義的フェミニズム観を先取りする

ラディカルなものであったと、論者は主張する。

第三章では、男性が主流であった十九世紀アメリカの西部芸術／文学界で、唯一彼らに比肩したと言われる Mary Hallock Foote のジャーナリズム作品に焦点を当て、フレデリック・レミントンらが形成したアメリカの「西部」表象がどのように改変を要請されていったかを論じる。ニューヨークの雑誌『センチュリー・マガジン』誌に掲載された Foote の「西部風景シリーズ」には、従来の「西部」表象のなかではしばしば不在であったドメスティックな女性が書き込まれている。このことにより Foote は、バッファロー狩りやインディアン戦争というモチーフからなるジェンダー的に（男性）コード化された西部表象を複層化していったと論者は主張する。Foote と西部言説との関わりには「抵抗と共犯」の関係性があり、Foote は領土拡張という国家事業およびそれに付随する植民地主義的イデオロギー形成に主体的に関与していったと同時に、その一方で支配的な西部言説が内包する矛盾や不合理をジェンダーや人種の問題系からあぶりだしていった。

第四章では、従来西部をめぐる二項対立（男性／女性、白人／他人種）のなかで二重に不可視化されてきたネイティブ・アメリカンの女性ジャーナリストを取り上げる。とりわけ論者が着目するのが、1900 年代初期に文学者・政治運動家として最も影響力をもった Zitkala-Sa である。Zitkala-Sa の存在は、「西部の女性」というカテゴリーが内包する差異を前景化するのみならず、白人男性を主体としたアメリカの西部言説を、ジェンダーならびに人種の問題系から歴史的修正を施していく重要な契機になったと、論者は主張する。主流雑誌『アトランティック・マンスリー』に定期掲載された Zitkala-Sa の自叙伝的エッセイは、他者として定位されてきたネイティブ・アメリカン女性の主体性が再編成されていくプロセスを再現しており、白人社会とインディアン社会の境界に立つ Zitkala-Sa にとって、言わば「境界」は周縁ではなく、潜在的に白人社会を脱中心化する創造的・生産的な場であったと、論者は結論づける。

終章では、フロンティアが消滅したとされる 1890 年以降、女性たちがフィクションというジャンルのなかで西部言説を紡いで行った歴史的経緯に注目する。ひとつのケース・スタディーとして、Laura Ingalls Wilder によって書かれ『大草原の小さな家』シリーズの中の『長い冬』を取り上げ、この作品が戦後の GHQ 占領下の日本の女性や民主化に及ぼした影響を跡づけ、国家の境界や時間を越えて流通するアメリカ女性の「西部」言説の持続と再生の可能性を論者は示唆する。

審査の結果の要旨

本論文は、十九世紀のアメリカの西部女性史を新たな視座から考察する優れた論考である。なによりも本論文に関して評価しなければならないのは、従来アメリカ研究で頻繁に論じられてきた「西部」という地政学的概念形成のなかで看過されてきたジェンダーの問題系に、本格的に着手した功績である。従来の西部女性研究で見落とされていたジャーナリズムに光を当て、さらに「西部女性」というカテゴリーが内包する差異－人種や階級－にも細かく目配りを行いながら、歴史資料を地道に発掘し、また精緻に読み解いた点において、本論文はとりわけ高い評価に値する。

西部女性研究の先行研究のみならず、十九世紀アメリカ女性作家と帝国主義言説の関わりを理論化したエイミー・カップランの最新の理論を参照しつつ、かつまたそれを批判的に修正しながら、十九世紀のアメリカ合衆国における領土拡張と女性によるジャーナリズムの発展という二つの文化現象のかかわりを詳細に解明し、これによりアメリカの「西部」言説を生成したジェンダーをめぐる文化的・社会的な諸力学の葛藤がはじめて明らかになったと言える。

手紙や日記といった私的テキストから、農民の妻たちのためのマイナーな定期刊行物、全国紙に掲載された女性アーティスト／作家の「西部風景シリーズ」、ネイティブ・アメリカンの女性ジャーナリストによる自伝、さらには GHQ 占領下に日本に輸入／翻訳された小説『大草原の小さな家』シリーズに至るまで、広範囲の

資料を渉猟しながらも、その分析は決して散漫ではなく、その論旨はあくまでも一貫して明晰である。アメリカの女性たちが、ジャーナリズム活動を通じて領土拡張という帝国主義的イデオロギーに加担／介入した歴史的主体であり、フレデリック・レミントンやシオドア・ローズヴェルトらと同じようにアメリカ「西部」の創出者であったという論者の主張も、この堅実で労をいとわない調査や発掘という方法論に支えられて十分説得力のあるものになっている。

そうした明晰かつ入念な論証がもたらした最も大きな成果は、アメリカにおけるフェミニズム思想の形成過程について、新たな視座をもたらした点であろう。従来アメリカのフェミニズムの歴史は、十九世紀のリベラル・フェミニズムから二十世紀の第二波フェミニズムのラディカル・フェミニズムへという流れのなかで理解されてきたが、本論文の西部女性論はそのような時系列的な図式の見直しを要請するものである。とりわけ、第二章で展開される、西部の女性運動と農民運動の連動から導きだされるマルクス主義的フェミニズムの萌芽という視座は、その斬新さにおいて画期的とも言えるものである。

ジェンダーという問題系のなかで「西部」という地政学的概念を再検証し、アメリカ女性史及びフェミニズム研究の論議にも新たな展開の可能性をもたらすこの研究の重要性から、刊行が待たれる論文ではあるが、今後に向けて残された課題がないわけではない。アメリカ西部史、ジャーナリズム史、女性史、フェミニズム史などの学問分野を横断した学際的研究であることに起因すると思われる、焦点の分散である。複数の問題系を往復しつつ考察を行う本論文では、各章の閃きに満ちた洞察が必ずしも有機的に結びついておらず、その結果として重要な見解が論文の全体のなかではインパクトを失ってしまうという傾向が散見される。これは学位論文を公刊する際に解消することが期待される。しかしそれは本論文のとした学際的研究という研究手法に内在する問題でもあり、本論文の成果の重要性そのものを減じるものではない。よって本論文を、課程博士学位論文としてふさわしい内容であると判断する。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。